

余話 (3) 枯れた花にも華がある

華道家元池坊では「枯れた花にも華がある」という。これは、室町後期の戦国時代に活躍した池坊専応の口伝を記述した伝書『池坊専応口伝』の精神に基づく考え方である。私は池坊を学んだ身ではないが、日本の華道全般、ないしは、日本人の美意識に、そういうわびさび文化的な考え方は底流していると思う。

川端康成はノーベル賞を受賞した時「美しい日本の私」と題した記念講演を行った。その講演の中で、この花伝書『池坊専応口伝』を引用し、「いけばなが小さい瓶上に大きい自然を象徴するものであること、『野山水辺をのづからなる姿』（注：このフレーズは、同花伝書のキーフレーズのひとつ）を花の心として、破われた器、枯れた枝にも“花”があり、そこに花による悟の種がある」と、解説したそうだ。

そうなのだ。野辺で朽ちゆく草花の姿も、また、生け花という様式美をもって生け上げられ、次第に枯れる草花の姿も、美しいと思う。ドライフラワー作品というフラワーアレンジメントに発祥する枯れた花姿もあるが、それは別の話。ドライフラワー作品は、生け花の美の基準で創り上げられる花姿とは異質のものだと思う。

さて、生き生きとした色艶の花がある。【左】アンズリウム（赤系と緑系）、ピペリカム（実の色は赤と白と緑とピンク）、そして緑葉のモンステラ。【右】花色が赤い濃淡のダリア。



1 週間ほど経過し、【左】ダリアは花の外周から枯れ始め、花色はえも言われぬグラデーションを呈してきた。

さらに1 週間ほど経過し、【下左】ダリアの花は萎れが進み、花色は退色し続けている。【中下】ピペリカムの実は色によっては早くも枯れてしまい、赤や白は陰りが見えつつも色を保っている。【下右】アンズリウムは萎れが入り、色艶を失おうとしている。

そしてさらに1 週間ほど経過し、1 カ月近く経った時 ⇒ [次ページへ](#)



【左】ダリアもアンスリウムも、枯れてくすんだ色を残し、艶は完全に失った。モンステラの葉も黄色く枯れ始めた。【右】ピペリカムの実はこの色も枯れてしまって水分を失い、硬く小さな黒っぽい塊になった。が、それでも美しいと感じる自分がある。



これ（右）は、もう随分前から枯れたままの花材だ。
苔むしたツツジの枯れ枝の葉は、凍てついたように時を止め、
ちょっと触るとあえなく散る。
ギボウシは買い求めた、生け上げた時の葉の姿のまま。
レモンリーフは、ためが効きにくい（曲げにくい）ので、
購入し、切って生けた時の曲（きょく）そのままだ。
どれも枯れた姿を固定している。
でも、美しいと思う。



移菊（うつろいぎく）という菊、言葉がある。 [移菊 - Wikipedia](#)

Wiki 曰く <移菊とは晩秋のころ白菊が花卉の端から紫がかって来たものを言う。有体に言ってしまうと、花卉に霜が触れるなどして植物組織が損傷を受け色が変わったもので、園芸用語で言う『霜焼け』に過ぎない。しかし、平安貴族の紫への愛着から、ともすれば通常の白菊よりも美しいとさえされた>とのこと。私のこのコーナー「かさねの色目の花あそび」でも、そうした色目は再三登場している。

もう少しWiki を引用しておこう。

<原産地の中国で菊は晩秋の野に凜と立つ姿と清しい芳香から四君子の一つとされ、「不正を寄せ付けぬ高潔さ」「不遇の際も変わらぬ友情」「長寿をもたらす仙人の霊薬」などとのイメージで愛された。ところが、日本に渡ってから桜のように儂げなイメージをもたれるようになった。

平安朝の貴族は、盛りを過ぎかけた白菊がほのかに紫がかった風情をことさら優美なものとして愛好し、「一年に二度の盛りを迎える花」「冬枯れの直前まで美しく咲く花」と愛でた。通常「うつろひたる花」は萎れてみすぼらしくなった花を示すが、「うつろひたる菊」に関しては美しいものとして別格に扱う。

重ねの色目にも採用されており、表は中紫、裏は青あるいは、表は紫で、裏が白（山科流）。源氏物語にも「うつろひたる菊」などという呼び方で登場し、鑑賞するほかに挿頭や手紙の付け枝として利用されていたことがわかる。>

私がこの「余話」で紹介した花たちは、つまりは、萎れてみすぼらしくなった「うつろひたる花」である。しかし、私には心惹かれた美しい花たちであった。